

保護者のための不登校セミナー 実施結果

平成23年11月6日（日）
10時から16時45分
県立総合教育センター

参加者 約350名

セミナーの概要

<第一部 基調講演>

演題

「子どもの心情に合わせた関わり方」
～「待つ」間、何をすればいいの?～

講師

埼玉県立大学・大学院教授 東 宏行 先生



1. 不登校の子どもに対して

- ・不登校の子どもに対して、このような言い方をすれば良くなるという魔法のような言葉はない。
- ・方法というよりも、方法の土台となる関係が大切である。
- ・子どもとどのような働きかけをするかと考える前に、関係づくりをしていくことが重要である。

2. 支援のポイント

(1) 不登校の子どもたちの心情は刻々と変化している

- ・学校の話拒否されたからといって、その後、全く学校の話避けることが良いとは言えない。
- ・激しく拒否したのだが、1ヶ月後には全く正反対の感情になっているということもよくある。
- ・関わり方は流動的であり正解はない。多様な関係づくりをしていくことが必要である。

(2) 待つという方法は誤解されやすい

- ・今は登校刺激しても効果がないのでもう少し待ちましょうというアドバイスを色々なところで受けると思う。「待ちましょう。」と言うと何もしないことだと受け止めてしまいがちである。
- ・学校の話をしてはいけない、勉強の話をしてはいけない、だから話をするのではない、何もしないというのは、待っていることとは違う。見捨てている状態になってしまう。
- ・待とうと思っても我慢できず、かえって過剰な支援をしてしまうこともある。「待つ」ということは不登校の子どもへの対応としては大切なことであるが、待っている間に、大人にが自然体でできる、日常の支援はたくさんある。

3. 近年の不登校の様子

- ・不登校児童生徒数は、一昨年までは12万人台であったが、昨年11万人台になった。人数は減ったとしても、近年の不登校は質的に変化しているように思う。
- ・統計上は減っていても、本当に減ったかというのは、はっきりとはわからない。
- ・不登校への対応がうまく転換し始め、行政機関でも民間の中でも不登校への支援の方法が蓄積され、成果が出始めているとも言える。

4. 不登校の子ども自身の気になること

(1) 不登校は反抗期に変化する

- ・「思春期になってきた子どもにどう接していいかわからない」という相談が非常に多い。家庭では激しい反抗をし、些細なことで母親にあたることが多く、父親には向かわないケースが多い。
- ・学校では目立たずおとなしい子どもであることも多く、学校の先生にも分からない。

- ・子どもたちは不登校になっても親の期待には応えたい。でもそうできない自分にすごくイライラしてしまう。どこにぶつけていいかわからない。そこに色々なことを言われると反抗する。

(2) 今の子どもたちは非常に察知力が強い

- ・周りの大人たちが何を考えているのか、どのような意図で何をしようとしているのか、自分に何を求めているのかを察知する能力が高い。
- ・理由や理屈をつけて学校へ行こうとしないとも言える。このような子どもは、ある意味では適応力があり、周りの大人が理由を知りたがっていることを分かっている。
- ・自分を傷つけたりしながら、学校に行かないで良い理由を一所懸命探している場合もある。

(3) 情報化がもたらした携帯電話での友達間のトラブル

- ・互いに気遣いをしながら慎重に事を運ぶが、互いに警戒してしまう。これが情報化や携帯の難しさである。
- ・これに対して名案はないが、意図的に関わるのではなくて自然に接することである。一番大きなキーワードはさりげない関わりである。
- ・近年は、子どもよりも大人の方が様々な情報に振り回されてしまう傾向が強いように思う。

5. 不登校児童生徒への支援方法

(1) 支援している人との関係

- ・その子と担任の先生との関係であるとか、友達との関係であるとか、色々な関係があつてこそ登校支援が成り立つ。率直に話し合える友達をいかに作っていくかが大切である。
- ・大人が学校のことや勉強のことを率直に話せる関係を作っていくことが大切である。
- ・学校に行かせることを目的とするのではなく、率直に話せる関係を作っていくことを目的にする方が、適切な支援ができる。

(2) 思春期のある一定の時期の接し方

- ・思春期になると、親に話したくないことがたくさん出てくる。すべてを聞くことは無理である。必要以上に聞くことにより、ぎくしゃくした関係になりがちである。
- ・本人を変えようとするのではなくて周囲が変わっていくことで状況が変化することがある。
- ・家族関係を変えていくと本人が変わっていくことがある。

6. 大人と子どもの関係の部分で気になること

(1) 過剰支援と過剰非支援

- ・情報が過剰にある中で、大人のとまどいが大きい。本やホームページに多くの情報がありすぎて大人の方が迷ってしまうことが最近増えている。
- ・過剰に支援しすぎてしまったり、支援をしなさ過ぎたりというのが多い。
- ・友達が誘いに来るのは非常に良い効果ができることがあるが、それを大人が仕組んで、友達との関係を無理に作ろうとすると、大きなリスクを伴う。二次的な問題が起きることもある。

(2) 聞かない接し方が重要

- ・不登校の子は何が理由で学校に行けないのか自分でもよく分からない。
- ・色々なことが理由になっている。
- ・問いただすと、子どもが理由や論理を、場当たりに作りあげてしまうことがある。

(3) 刺激をした方がよいか、しない方がよいか

- ・特に保護者が最も悩む問題だが、刺激する・しないの中間的かかわりが、とても大切である。
- ・オンでもオフでもない関わり方を豊かにしていく。これがポイントになる。

7. 子どもの心情に合わせた関係づくり

(1) 関わり方は不登校の時期と状況によって変わる

- ・学年、年齢によって刺激の方法は変わってくる。
- ・小学校低学年は、はっきりと行動の目標を示す方がよいことが多い。
- ・小学校高学年くらいからは、本人の意志を尊重することが必要となる。
- ・中学生くらいでは選択肢を示し、自分で決めさせることも考えて接する。
- ・高校生くらいでは大人扱いする場面も作っていく。

(2) 学校暦に合わせた関わり

- ・学期や学年の初め等、スタートの時期はクラスにも入りやすい。それ以外の時期では難しい。クラスの雰囲気、途中から入ってとけ込んでいくことは非常に難しい。
- ・行事をきっかけに働きかけをするのはよい。終わりがあるからである。

(3) 再登校への働きかけにはタイミングがある

- ・学年、年齢にあわせて変わってくる。不登校の期間や状況によって支援方法は違う。
- ・初期の頃の対応は、身体症状が出ている状態では、登校刺激はひかえる。
- ・不登校になってから4日目ぐらいまでは励ましてよいし、本人も登校したい気持ちを持っている。
- ・1～2週間目くらいが、励ましを続けるか、控えるかの判断をする時期である。
- ・刺激や励ましをする場合、ただだと言いつけるのではなく、適切なタイミングで行うこと、また「放課後に保健室に来よう」等、具体的に行うことがコツである。

8. 待つというのは何もしないということではない

(1) 待つのではなく「待機」すると考える

- ・学校への促しやはたらきかけをする時を待つと考えてほしい。

(2) 充実した生活が自己肯定感につながる

- ・子どもに生活の充実感を与える。料理等にも段取り力がつくといった効果がある。

(3) 日常の関係を刺激する

- ・目標は率直な考えを言えるようになること。学校や勉強以外の会話や体験を増やす。

(4) 発達障害のある場合

- ・長い目で見る。特別扱いをするのではなく、特別な配慮をすることが必要。医療機関を活用する際のポイントは、本人の困り感があるかどうか。無理やり連れて行かれた感を持たせない。

9. まとめと結論

(1) 作為的にならないこと

- ・よい支援方法があることを学び、それをそのまま試そうとしても、子どもが作為を感じてしまったらうまくいかない。率直に話せる関係づくりをする。

(2) 不登校支援の方法には、正しい答えはない

- ・こんなはたらきかけはどうだろう、と思ったらまずやってみること。そしてやってみて、本人の様子を観察し、修正していくこと。これを繰り返していくことが優れた支援である。
- ・上手な支援ができている人は、これを何度も何度も繰り返して関係を築いていく。

<第二部 個別相談・体験談・情報提供等>

参加施設及び団体

- | | |
|--------------------------------|----------------------|
| ・フリースクール ぱいでいあ | ・不登校・ひきこもりを考える埼玉県連絡会 |
| ・特定非営利活動法人彩星学舎 | ・不登校生の親の会 ココット |
| ・財団法人こども教育支援財団 「元気の泉」さいたま分室 | ・松実高等学園 |
| ・NPO法人KHJ埼玉けやきの会家族会 | ・星槎学園高等部大宮校 |
| ・わかば塾 | ・第一高等学院埼玉本部キャンパス |
| ・NPO法人埼玉教育支援センター | ・むさしの高等学院 |
| ・新座自然宿フリースクール | ・クラーク高等学院さいたま校・所沢校 |
| ・NPO法人フリースクールむさしの学園 | ・浦和高等学園 |
| ・子ども・若者相談総合センター 「コ・ラ・ボ」 | ・日本産業専門学校 |
| ・NPO法人しゃぼん玉の会 | ・KTC中央高等学院大宮キャンパス |
| ・NPO法人越谷らるご／フリースクール りんごの木 | ・自然学園 |
| | ・市町村教育委員会 |
| | ・県教育局・高等学校 |

※順不同

<第三部 参加者からの質問への回答及びまとめ>

埼玉県立大学・大学院教授 東 宏行 先生

Q：不登校の乗り越え方は。

A：どう克服したかでその後の生き方が変わってくる。不登校になった後、周りの支援にもあつて解決したが、また不登校になったという、再不登校の例も多いようである。

Q：不登校だと知っている近所の人に訪ねられたらどう応えたらよいか。

A：何も恥ずかしいことではないので、率直に周囲の方へ言えるようになっていけると良い。これが恥ずかしいことだと思わせてしまうと、不登校の子ども自身がつらくなり、追い詰められてしまう。

Q：不登校になりやすいといった傾向はあるか。

A：ない。1992年文科省調査委員会では、色々な考え方や意見があり何が要因なのかはつきりしていないため、どんな子どもでも不登校になりうるという見解が示され、今日までその状況は変わらない。

Q：家庭内暴力があるのだが。

A：子どもの甘えというより苦しみである。甘えというのはSOSである。言葉にできないジレンマをぶつけている。落ち着いているときに話を聞き、少しずつ不安感を取り除いていく。

Q：中2の途中で不登校。現在中3で人と会うのが怖くフリースクールを薦めるが拒否気味である。

A：中3の場合は、周りから何も言わなくても進学のことを気にし始める。次の居場所を本人は気にしている。学校説明会という進学を意識してしまうので、文化祭に行く程度がよい。働きかけは適度な間隔で繰り返していく。パンフレットを何も言わずにおいておくと、気になれば本人が見る。

Q：中1から不登校。現在は中3で相談室登校。勉強はしている。

A：中学生くらいだと、8割くらいは大人扱いして信じて接することが必要。偏差値だけで考えてしまわないよう助言が必要。本人が行きたい学校を見学に行くことが大切。

Q：部活動がやりたくて高校へ行った。途中でうまくいかなくなり、本人が通信制を希望している。

A：高校生になったら自分で判断させる部分を残していくことが必要。本人の意志を尊重しつつ、親の気持ちを率直に伝え、話しができるとうよい。自分で説明会に行き、願書をもらい、提出できるよう支援する。

Q：高校1年生、夏休みから不登校になった。どう対応したらよいか。

A：現実を知らせることが大切。現実を知らせながら小さな目標を設定していく。

Q：高3で不登校、どうしたらよいか。

A：現実と向き合わせる必要がある。あと何日で留年になるなどを考えさせる。簡単に転校しても、解決しないことが多い。親として何ができるか。本人が決める部分を残しておきながらアドバイスする。

Q：担任から不登校の理由を調べてほしいといわれる。どう対応してかいいかわからない。

A：大人はどうしても理由を考えてしまう。だが、子どもにはしつこく聞かない方がよい。大人は因果関係で考えてしまうので、担任が理由を聞きたいということは、それだけ何とかしたいという気持ちがあるのだろう。支援する大人同士が、率直に話ができる関係を作り、子どもの状況を伝えながら、これからどんなかかわりをしていくかを考えていくことが大切。

Q：不登校児童と積極的に関わろうとしない学校に対して。

A：現状や希望を率直に話し、学校へ提案する。それでも動いてくれない場合は、フリースクール等、

中間の機関に相談する。学校と家族の間に相談できる場所があると違ってくる。大丈夫という言葉は根拠がないといけない。学校以外の場所で肯定感を持たせていくことが必要。

Q：子どもに対して対応を変えていこうと思うが、どう変えていけばよいか。

A：この講演会でいいことを聞いたからその通りするというのは良くない。急に变える必要はない。変えようと思うなら、学年の初めや学期の初めなどがよい。

Q：学校は不登校の子について理解しているのか。担任に対して不信感がある。

A：親や担任が不信感を持つと、子どもにも伝わる。卒業式に出られず、担任がフリースペースに来て卒業証書を渡してくれた例のように、親と担任が協力し合える関係を作ることが必要。

Q：どんな進路を選ばせたらよいか。

A：高等学校は多様化しているため、色々なカテゴリの中から本人がいきそうなものを選んでいくことが大切。体調不良だった生徒が、進学先が決まった瞬間体調が良くなった例もある。

Q：親戚のおじさんとどう関わったらよいか。

A：親戚として普通のおつきあいができる環境を維持し、話ができる関係を作っておくことが大切。普段から子ども以外のことも話せる関係を作っておくこと。

Q：アスペルガーと診断を受けた。子どもへの接し方で注意することは。

A：発達障害は、時間をかけながらなじんでいくことが必要。成果を出すことを焦らないこと。関係づくりには時間がかかることを理解する。しっかりと叱っておくことも必要。事実を確かめ、本人の考えを認めながら、その場で注意していくかかわりが必要。

Q：祖父、祖母と子どもとの関係が心配である。

A：「おばあさんとの関係を少し離しましょう。」と考えがちになるが、日中に本人が通える場所を作ることで、離れた時間を作っていく等、具体的に考えていく。

Q：友人との関係。友達が迎えに来てくれるが、続けてもらって良いのか。

A：その子たちとの関係がどうかで決まる。子どもが気にしているようなら友人に伝える。子どもが望んでいない時は、動かない方がよい。

Q：昼夜逆転の生活を改善する方法は。

A：夏休みなどの長期休暇や年末年始の休暇を利用して、家族での旅行を機に変える等の方法がある。

Q：ペットが死んだら。

A：ペットから他のペットや人間へと依存対象を変えていくとよい。安定のために、ひとつに頼るのではなく、常に次の対象への移行を考えておく

Q：身体症状が長期間続いている場合、刺激はしない方がよいか。

A：通常、発熱が1年も続くことはない。病院との連携が必要である。体調が気になる場合は、その症状に合わせた病院・診療科へ連れて行く。

Q：1日一回の買い物しかできない。どう支援したらよいか。

A：今の状態を肯定的に考え、維持しながら、外出の時間を長くしていたり、内容を変えたりする。

Q：パソコン依存を何とかしたい。

A：使用方法についてのルールを約束して買ったかどうか重要。途中でルールを設定することは、関係を悪化させる。目に良くない、身体のことを心配といった立場で話し合っ変えていくこと。